ケーススタディ

滋賀県立美術館

所在地　滋賀県大津市瀬田南大萱町1740-1
設置者　都道府県（滋賀県）

登録博物館／美術博物館

DATA

アール・ブリュット作品収集

2017年度から継続事業　｜　鑑収集・所蔵・発表賞

滋賀県立美術館は平成29年度からアール・ブリュット作品（障害者の創造活動に関する考え方の一つ。詳しくは本文参照）の収集・収蔵という、公立美術館として先駆的な事業に着手している。目的は、アール・ブリュット作品の鑑賞機会を広く提供するとともに優れた作品を後世に継承すること。2023年9月現在、収蔵数は731件にのぼり、国内のみならず世界でも有数の規模のコレクションとなって企画展などで積極的に活用されている。

企画展「人間の才能」における澤田真一作品のレプリカの設置

2021年度実施　｜　鑑賞

企画展「人間の才能　生みだすことと生きること」は、アール・ブリュットにフォーカスし、その歴史を紹介するとともに「そもそもアートとは何か」「人間にとって重要な才能であるつくるとは何か」を問いかける展覧会。展示では、日本を代表するアール・ブリュットの作家のひとりである澤田真一の作品のレプリカを置き、視覚障害者も触って感じる作品鑑賞の機会を提供した。

展示コーナー「TRAVEL to 滋賀に生きる造形」

2022年度からの継続事業　｜　発表

滋賀ならではのアートを発信し、来館者の滋賀県内での観光意欲の促進をはかるために、館のエントランスロビーに特設コーナーを設けて、信楽焼と障害のある作家による「信楽焼×アール・ブリュット」の二人展を常設的に展示する。期間は約1年間で、現在、2回目の企画展示となっている。合せて、関連Webサイトで県内のアートスポット情報を届けている。

取材日	2023年12月18日
回答者	木村元彦（滋賀県立美術館　副館長） 山田創（滋賀県立美術館　学芸員）

アール・ブリュット作品収集

収集・収蔵の背景や、そこに至る経緯をお聞かせください。

滋賀県では「日本の障害者福祉の父」とも呼ばれる糸賀一雄氏らが戦後まもない1946年に創設した近江学園で、粘土を利用した造形活動が行われ、以降、滋賀県内の福祉施設の多くでも造形活動が先駆的に展開された歴史があります。こうした流れの延長線上の出来事として、ボーダレス・アートミュージアム NO-MA[1] が2004年に開館し、同館がパリ市立美術館に協力して開催された「アール・ブリュット・ジャポネ展」（後述）の成功によっ

1 障害者のアート作品を展示する場所として、近江八幡市の町屋をリノベーションして2004年にオープン。2007年に博物館相当の承認を受ける。運営は社会福祉法人グロー。

て、滋賀県にアール・ブリュットという言葉が普及しました。これらを踏まえ、2012年、県はアール・ブリュット発信検討委員会を設置しました。その中では、滋賀で生まれた美の一つとしてアール・ブリュットを発信することを目指し、例えば福祉の現場での創作活動を支援していく、あるいは障害のある方の公募展を開催する、加えて美術館がアール・ブリュット作品を収集し、展示もしていくということが盛り込まれました。

それを受けて、当館では2014年度にアール・ブリュットを担当する学芸員を採用して調査研究を進め、アール・ブリュット作品の収集方針（※表1）を定め、2016年度から収集を始めました。

また、当館は1984年開館で建物が老朽化していたことから、約4年間休館して改修工事を行い、2021年6月にリニューアルオープンしました。その際、館名を「滋賀県立近代美術館」から「滋賀県立美術館」に変えています。これは、さまざまな作品を収蔵する中、アール・ブリュットのような近代の範疇ではおさまらない作品も徐々に収蔵するようになり、“近代”という特定の時代や既存分野で評価が固まった作品・作家だけに向き合うのではなく、より幅広く美術や表現に向き合っていくということで、その柱の一つにアール・ブリュットを据えた館としての活動の考え方そのものの転換であると言えます。

表1）滋賀県立美術館のアール・ブリュット作品収集方針

滋賀県を軸に、日本を中心としたアール・ブリュットを概観するコレクションの形成

〈収集の考え方〉

- 福祉の現場から優れた造形作品を多数生み出してきた滋賀に立脚しつつ、アール・ブリュットに関する日本を中心とした代表的な作品や、今後は一部海外の作品も視野に入れ、日本のアール・ブリュットの特徴や魅力を概観できるよう、以下に基づいて作品を選定する。
- 美術館でのコレクション展示が可能となるよう、まとまった点数の作品を継続的に収集する。

〈作品収集の方針〉

- 滋賀のアール・ブリュットに関する作家の作品および関連資料（背景としての障害者福祉施設等における造形活動から生まれたものを含む）
- 日本のアール・ブリュットの特徴を把握できる作家の作品および関連資料
- アール・ブリュットに関連する現代美術作家および海外作家の作品

現在、アール・ブリュット作品の所蔵点数はどれくらいですか？

滋賀県内のみならず、国内アール・ブリュット作家の作品を中心に収集し、当館が所蔵するアール・ブリュット作品は731件（2023年9月時点）になっています。これには、2023年8月に公益財団法人日本財団から寄贈された「アール・ブリュット・ジャポネ」展の出品作品549件も含まれます。2010年にパリのアル・サン・ピエール美術館で開催された同展には日本各地の障害のある人や独学のつくり手たちの作品が出品され、大きな反響を呼びました。会期後、巡回展も国内各地で開催され、日本のアール・ブリュットに注目を集める契機となりました。その後、日本財団がそれら国内外で高い評価を得た作品を保存・活用していましたが、当館に寄贈されたことで、当館は、国内の公立施設では最大級、世界でも有数の規模のアール・ブリュット・コレクションを有することとなりました。

なお、「アール・ブリュット＝障害者アート」ではありません。アール・ブリュットを直訳すれば「生（なま）の芸術」ということになりますが、1940年代にフランスの画家、ジャン・デュビュッフェが精神障害者や独学の作り手たちによる独自の表現に感銘を受けて、アール・ブリュット[2]という概念を提唱して以

2「それ（アール・ブリュット）は芸術的文化によって傷つけられていない人たちによって制作されたものであり、知識人の場合とは異なり、模倣がほとんどあるいはまったくない作品のことだ。従ってその作者たちは、すべて（主題、利用する素材の選択、置換の方法、リズム、書き方など）を自分自身の奥底から引き出してくるのであって、古典的芸術や流行の芸術という月並みな作品からではない。そこには作者によってひたすら自分の衝動からあらゆる面にわたって完全につくりなおされた、まったく純粋で、なまの芸術活動が見られるのだ」（末永照和 評伝ジャン・デュビュフェ アール・ブリュットの探究者』青土社、2012年）

来、さまざまな定義や解釈が見られます。また、その概念に含まれる作家には障害がある方が多いことも事実です。当館は原初の意味やその概念の歴史的変遷も俯瞰しつつ、アール・ブリュット作品を収集しています。

作品の収集、購入はどのように進めているのでしょうか？

まず、アール・ブリュットの文脈の中で重要な意味があるものを収蔵の候補作品とします。例えば、日本財団から寄贈された作品群は「アール・ブリュット・ジャポネ展」に出品され、日本のアール・ブリュットにおけるエポックを作ったものとして収蔵方針に合致しているものでした。その他にも、滋賀県における戦後の障害者福祉の歴史や、そこで展開されてきた陶芸などの造形活動の歴史を語る上で重要な作品も、もともとそれらを所有していた県立の福祉施設から作品を移管する形で収蔵しています。これらの作品は、国内、とりわけ地元、滋賀において、アール・ブリュットにつながる重要な作品と捉えることができるでしょう。

収集のプロセスは、一般的な美術館の作品収集と同じです。候補となる作品があがり、それらを第三者の専門家（収集審査部会と呼んでいる第三者委員会の委員）に作品を実見してもらって、収集すべきかについてのご意見をいただいています。

作品入手の交渉では、福祉施設に間に立ってもらうこともあれば、作家との直接交渉、また障害のある作家の作品を扱うギャラリーとの交渉などケースバイケースで行っています。また、障害によっては作家ご本人との直接交渉が難しいことも少なくなく、支援者に入ってもらったり、ご家族に同席してもらうことがあります。ただし、福祉施設や家族などが代理でコミュニケーションを行う場合であっても、当事者本人が不利益を被らないように、また本人が手放したくないのであれば無理やり求めることは倫理的に避けるべきであるという意識で交渉にあたっています。

作品の保管で注意していることはありますか？

所蔵作品の中心は絵画や陶芸が多いのですが、立体作品には紙とセロテープなどで作っているものもあり、既にセロテープが黄色く変色していたり、テープ自体が割れそうになっていたりする作品もあります。保存修復についてノウハウが確立されていないものを、どのように扱っていくかは、美術館として課題となってきます。

新しい保存技術が開発されるという可能性もあるかもしれないですし、作品が劣化する前に写真や映像などのアーカイブ化を行っていくことも検討できると思います。作られたときの状態や展示を記録することで、作品が劣化したとしても、作られたときの状態と比較しながら見せるといったことも可能になります。

障害者アートの収集・保存についてのアドバイスをお願いします。

当館は、アール・ブリュットという概念で調査・研究、収集・収蔵を進めていますが、いわゆる障害者アートであれ、アール・ブリュットであれ、作家や作品をどこで線引きするかという問題が出てきます。しかし、既存のカテゴライズでは収まりきらないものをいかに収蔵していくか、そこにアール・ブリュットを収蔵方針に掲げている美術館としての一つの意義があると思います。

もう一つのアドバイスとして、作家サイドとの交渉では、これまで美術館と作家の間でとられてきたものとは違うコミュニケーション能力が求められます。中でも社会福祉施設の雰囲気や施設の職員さんや家族の方の思い、ニーズなどを美術館側が理解をすることでコミュニケーションがうまくとれると思います。例えば、本人や周囲の人たちには作品づくりを芸術活動だと思っていない人も多く、収集意図を説明する際には繊細な言葉選びが求められます。福

社現場の意識を汲みながら、コミュニケーションをとることが大切なポイントになってきます。

企画展「人間の才能」における澤田真一作品のレプリカの設置

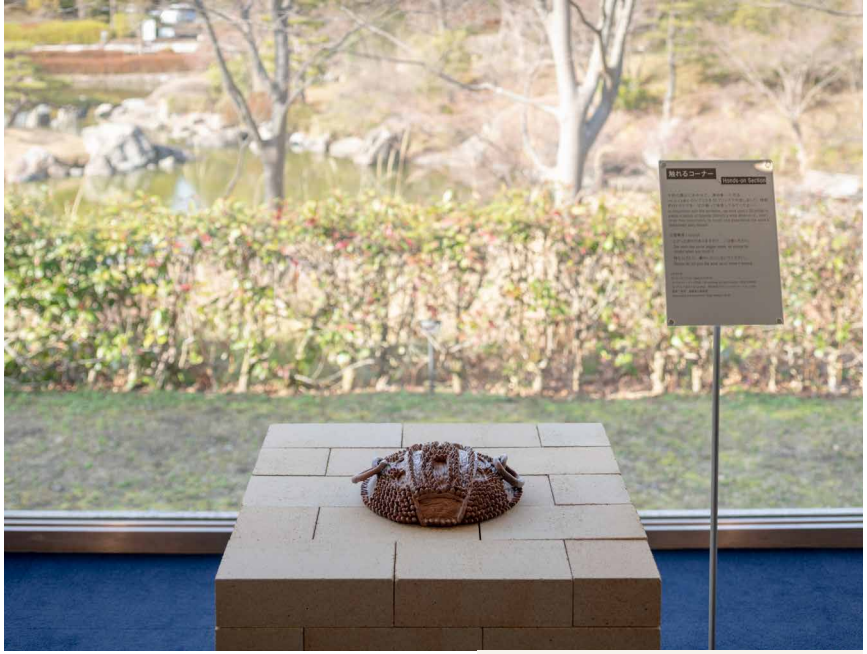
企画展「人間の才能」はどんな狙いで企画されましたか？

「人間の才能」は当館の保坂健二朗館長のキュレーションで、根源的な人間のつくる力に焦点をあてた展覧会[3]です。ここで紹介されている作家のほとんどは、いわゆるプロのアーティストではありませんでした。誰かに評価されることを望まず、日々の生活の中で独自の方法論を編み出しながらつくっていくかのような作品を御覧いただきました。「生み出すことと生きること」を接続させていただくことの意義を感じ取ってもらうものとなったのではないかと思います。

内外で評価の高いアール・ブリュット作家の澤田真一さんの作品のレプリカも展示されましたね？

当館の役割の一つにアール・ブリュット作品を展示することがあります。日本のアール・ブリュットに障害者が多いという構造から考えると、このことは、障害者による表現の機会を作っているとも考えられるかもしれません。一方で、障害という話題で考えたときに、彼らの表現を取り上げるだけではなく、

3 同展では、アール・ブリュットを相対的に捉えられるようにするため「①アール・ブリュットとは何か？　歴史を遡り思いを巡らせる」「②圧倒的な作品の力　生みだすことは生きること」「③アール・ブリュットの多様性　つくることの根源に迫る」「④アール・ブリュットっていったい？　一緒に考えてみましょう」の4章で展示を構成。



澤田真一の作品のレプリカ（撮影：表恒匡）

障害のある人に作品を鑑賞してもらうということも重要なことです。そこで、3Dプリンターで忠実に再現した樹脂製レプリカを展示し、視覚障害のある人を含めて誰でも実際に触って鑑賞してもらえるようにしました。実物の陶器の感触とは違いますが、形を忠実に再現していて、作品の良さ、面白さを感じていただけます。他にも紙の作品で、作家のご家族の了解を得て、作品に触れられるようにしました。

これらは障害のある人への対応であるとともに、お子さんや一般の方にとっても鑑賞の体験をより多角化し、より一歩踏み込んで深く興味を持っていただける工夫でもあります。実際、多くの来場者が澤田さんのレプリカに触れていました。ちなみに、このレプリカは、その後の常設のコレクション展のときに、実物と並べて展示して、活用しています。

他の企画展などでも障害者の鑑賞について工夫されていることはありますか？

2023年度の企画展「“みかた”の多い美術館展」（2023年10月7日～11月19日）は、子ども連れや障害のある人、海外にルーツのある人など、普段はあまり美術館に来ない人たちにとって美術館が開かれた場所になるためには何をすればよいのか、通常の美術展鑑賞の形式を見直して、多様な鑑賞のあり方を探る展覧会として催しました[4]。いろいろな人を巻き込むというコンセプトから、当然、障害のある人が来ることが予想されたため、チラシにも「小さなお子さんがいらっしゃる、障害があるなどの理由で来ることをためらっているのであれば、事前におっしゃってください」[5] とアナウンスしました。実際に、視覚障害のある方が来館するという連絡を事前にいただいて、ガイドにつく機会が何度か生まれました。こうした文言が入っているだけで、ある程度安心して来館されるという効果はあったと思いますし、「“みかた”の多い美術館展」での障害のある方とお子さんの入館率は、他の展示会よりも比較的高くなっているということもあるので、その要因として、情報発信の工夫の効果はあったのではないかと思っています。

さらに重要視したのが、会場での対応でした。当館では監視スタッフは民間委託していますが、多様な人が来場することを想定し、普段の展覧会よりも時間をとって、館側が企画展の意図などを丁寧に説明し、接し方などについての研修も受講してもらいました。また、監視スタッフから「こういうお客様がいらしたときには、どうしたらいいですか」などの質問をペーパーでもらって、それに対して1つずつ回答していきました。

その結果、最初は監視スタッフに戦々恐々とした感じが見られたものの、徐々に緊張がとけ、個々のお客様に合わせた柔軟な対応をしていただけました。確かに、監視員泣かせの展覧会だったとは思います。いつもは「触らないでくださいね」というところを「触ってもいいけれど、壊さないでくださいね」というように、ちょっと特殊な目の光らせ方をしなくてはならず、子どもは走るし、車椅子の人もかなりいらっしゃる。でも、時間を経るごとにスタッフの皆さ

「“みかた”の多い美術館展」

4 同展では「さわったり、聞いたりして、みる」「おはなしして、みる」「いっそ自分でつくって、みる」など8つのゾーンを設けて、通常の美術鑑賞とは異なる美術館の楽しみ方を提案した。

5 「小さなお子さんがいる、障害があるなど、さまざまな理由で来館を迷っている方へ　当館では、しーんと静かにする必要はなく、おしゃべりしながら過ごしていただけます。さらに本展では、より多くの方々に楽しんでいただくため、「やさしい言葉や点訳にした解説文」、「さわったり、つくったりするコーナー」を用意します。その他、来館にあたっての不安がある場合は、事前の情報提供や、当日のサポートのご希望に、可能な範囲で対応します。」

んがけっこう楽しそうにいきいきと会場で対応されていたように感じています。会期中に起こったことやわからないことを積極的に質問したり、自主的に対応講座を開いたりと、頑張っていきたいという姿勢がありありと伝わってきて大変嬉しかったです。

具体的なエピソードとして、「来場された方の車椅子のテーブルの上に作品をのせて鑑賞してもいいか」という問い合わせが監視スタッフからあり、作品の性質上、動かしてもダメージがないようなものであったため、テーブルの上にのせて鑑賞をしていただくという対応をしました。これは、もしかしたら、その場でスタッフがお断りをして、せっかく美術館に来ていただいたのに悲しい思いをされていたかもしれないケースで、スタッフの機転によりそれを防げた事例として心に残っています。

経験からいうと、障害のある人が来館することに、そんなに構えなくてもいいのではないかと思います。障害のある人に対し緊張して対応すると逆にうまくいかなかったりします。肩の力を抜いて接した方がうまくいくことが多かったりするように思います。

展示コーナー「TRAVEL to 滋賀に生きる造形」

展示コーナー「TRAVEL to 滋賀に生きる造形」はどのような事業でしょうか？

当館はアール・ブリュットのコレクションを一つの特徴としていますが、他にも現代美術あるいは日本美術のコレクションがあり、それらを活用した展示も多いため、アール・ブリュット作品を常に見られるとは限りません。こうした背景もあり、入口の近くに常設展示コーナーを設けました。ここでは滋賀県産の陶芸である信楽焼と、アール・ブリュットを2本の柱に据えて、それぞれ1名の作家の作品を紹介するというかたちで長期間展示しています。

「TRAVEL to 滋賀に生きる造形」常設展示コーナー

実施のきっかけや事業展開の目標を教えてください。

当館が、2021年に文化庁の「文化観光推進法に基づく拠点計画」の認定を受けたことがきっかけです。そのときに掲げたテーマが、滋賀ならではのアートを生かして、来館していただき、さらに県内を巡っていただくということです。これが大きな目標で、「アール・ブリュット×信楽焼×観光」ということで展開しています。当館と県の美の魅力発信推進室が連携してウェブサイト「TRAVEL to 滋賀に生きる造形」を立ち上げていて、展示と関連する工房やギャラリーなど、滋賀県独自のアートスポットの紹介もしています。